Takaoka Craft Ichiba-machi

高岡クラフト市場街 2018-2019

提供コンテンツの「グッドデザイン受賞」

富山大学芸術文化学系准教授（高岡クラフト市場街 副実行委員長） 有田 行男

「高岡クラフト市場街」とは

「高岡クラフト市場街」とは、富山県高岡市の中心市街地に於いて毎年秋頃に開催されるクラフトに関する総合イベントです。「工芸都市高岡クラフトコンペティション」の入賞入選作品を展示販売する「工芸都市高岡クラフト展」を中心に、入賞作家の作品を販売する「作家のひきだし展」や、伝統産業に関わる職人の工場や工房を巡る「クラフツーリズモ」、土蔵造りのまちなみが残る山町筋の軒下を活用した「軒下マルシェ」、クラフトのワークショップなど多くのイベントで構成されています。富山大学芸術文化学部（以下、芸文）が参画する産学官連携事業として2012年10月4日～8日に第1回が開催され、2019年9月21日～23日の開催で第8回を迎えました。初年度は10イベント、来場者は約14,000人でしたが、2016年度に「金屋町楽市」（2018年度から「ミラレ金屋町」に改称）と開催期間を合わせ「工芸都市高岡の秋」として開催したことで来場者が約23,000人と増加し、2018年度の開催では74イベント、来場者は約27,600人となりました。また、2016年度から芸文では、来場者を案内する「市場街コンシェルジュ」の運営や関連ツールの制作など、学生らの関わりをプロジェクト授業として単位化しています。

「高岡クラフト市場街」の運営

「高岡クラフト市場街」は高岡クラフト市場街実行委員会によって運営されています。構成団体は高岡市、高岡商工会議所、高岡市・工芸デザインセンター、富山大学芸術文化学部、高岡伝統産業青年会です。「高岡クラフト市場街」実施の背景としては1986年より続いている「工芸都市高岡クラフトコンペティション」の振興および「工芸都市高岡クラフト展」の来場者を増やしたい、来場者の方々に高岡のまちを楽しんでもらいたいという意図があります。営利を目的としたイベントではないため、有志の方々が中心となって実行委員会のメンバーが構成されています。このメンバーには芸文の教員も含まれており、芸文が実施するプロジェクト授業との連携を行なっています。プロジェクト授業を実施するためのイベントではなく、イベントの一翼を芸文のプロジェクト授業が担っているという構図が、芸文の地域連携への取り組みを象徴しています。

「高岡クラフト市場街」におけるコンテンツ開発

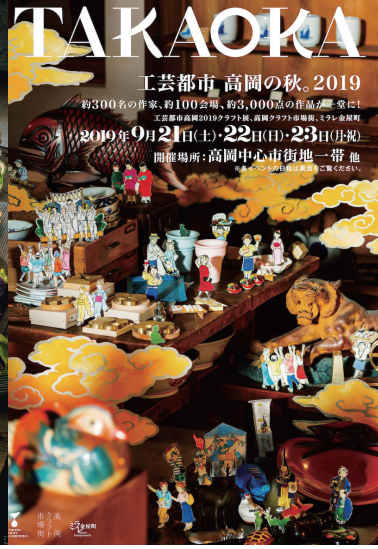
「高岡クラフト市場街」は高岡のまちが持っている資産をより魅力的に展開することを主旨としています。言い換えると高岡のまちとしてのプロモーション活動であり、内外へのブランディングです。このため、初年度の開催においては「工芸都市高岡クラフト展」を軸として、高岡に既に存在していたコンテンツを集約するかたちでスタートしています。前述の「作家のひきだし展」は芸文ギャラリーによって運営されていたイベントであり、「クラフツーリズモ」についても高岡伝統産業青年会によって運営されていたイベントです。2017年まで続いていた「クラフトマンズギャザリング」は高岡市デザイン・工芸センターによって運営されていました。個々の魅力的なイベントを束ねることで、更に魅力が増すという、まちづくりにも似た活動を「市場街（いちばまち）」という言葉に託しています。

このような背景と主旨において「高岡クラフト市場街」は多くのコンテンツを束ねるホルダー的な役割を果たすかたちで毎年度の開催を重ねつつ、2015年度からの芸文の関わり方がより大きくなったことで「市場街コンシェルジュ」「市場街パスポート」「職人・町人スタンプラリー」が生まれました。

「職人・町人スタンプラリー」のグッドデザイン受賞

「職人・町人スタンプラリー」とは「高岡クラフト市場街」で提供しているスタンプラリーのサービスです。来場者が「市場街パスポート」を手に、まちなかにいる高岡の「職人」や、高岡の「町人」を探して、「職人」や「町人」が持つスタンプを集めることで「市場街パスポート」が完成します。一般的なスタンプラリーは、店舗や観光スポットに設置されていますが、「職人・町人スタンプラリー」は高岡の大きな魅力である「ひと」に注目し、「ひと」を巡るラリーとなっています。ふだんはなかなか会話しづらい「職人」や「町人」とのコミュニケーションを可能とします。

スタンプラリーについては初年度から行われていましたが、当時はイベント参画店舗への来場者の誘引が



主な目的であり、汎用的なスタンプを用いていました。2015年度に芸文の学生らと参画店舗に設置されているスタンプのデザインを行うことに着手しましたが、高岡の魅力を店舗だけではなかなか語れない、表現できないことから「職人」という「ひと」を探して、スタンプを押してもらうというコンセプトが生まれました。高岡は「銅器」と「漆器」という伝統産業が存在します。伝統工芸的なものからモダンなクラフトまで、これまでの産業を次世代の産業へと繋げるべく多くの若い「職人」や「町人」が活躍しています。この方々の存在と活動を内外に広く伝えたいという思いがあります。

「職人・町人スタンプラリー」のデザインは当時、芸文の学生であった河原つかささんによるものです。2015年度は「職人」のみにフォーカスしてスタンプラリーのサービスを開始しましたが、来場者のみならず「高岡クラフト市場街」に関わる関係者にも好評であったため、2016年度は「職人」だけではなく関係者である「町人」にもフォーカスすることとしました。河原つかささんはプロジェクト授業として参画しつつ、卒業研究制作としても「職人・町人スタンプラリー」に取り組みました。

このスタンプですが、2015年度から2016年度にかけては職人堅気でクールなデザインを提供していました。これは来場者の中心が20代から30代の女性であったためですが、2016年の「工芸都市高岡の秋」としての開催によって来場者が増え、「職人・町人スタンプラリー」についても様々な世代の方々に興味をいただくと共に、子供たちの参加も目立って来たため、2017年度にスタンプのデザインを子供たちに寄り添うことができるものとしました。このデザインの一新によって、伝統産業を引き継ぐ「職人」や「町人」と子供という、なかなか接することがない両者が繋がるようになりました。まちの将来を担う子供らが「職人」や「町人」という職業について興味を持つきっかけとなります。また、興味を持った子供らがネットを検索した時のために、大人の方々向けのページと、子供ら向けのページをスイッチ可能な「職人・町人スタンプラリー」のwebサイト（https://www.syokunintyounin-stamprally.com）を制作、公開しています。

このような活動が認められ「職人・町人スタンプラリー」は2018年度のグッドデザインを受賞することができました。審査員の評価として次のようなコメントを頂いています。

「シンプルなアイデアだが、新しい工芸の生き残り方としての「ツーリズム」を最小限のデザインで実現しようとしている姿勢は素晴らしい。新しい顧客が伝統産業の背景に流れる文脈を知り、作り手の縁を読み解いてもらう手法として、ツーリズムは手工芸の生き残りのために不可欠な戦略であるように思う。願わくば単体の楽しいイベントとしてのスタンプラリーを超えて、産地の美しい物作りを伝えるブランディングと融合した形に発展することがあれば、さらに将来にわたって産地を元気づけられるプロジェクトになるだろう。」

「高岡クラフト市場街」における新しい取り組み

2019年度で第8回目の開催を迎えましたが、規模を維持しつつ継続させていくには多くの工夫が必要となります。2017年に山町筋に山町ヴァレーが誕生したことによって「高岡クラフト市場街」としての新たな拠点ができました。この山町ヴァレーを中心として「山町筋歩行者天国」を実施するとともに山町筋観光駐車場を活用した音楽イベント「市場街ナイト」を開催することで、家族で「高岡クラフト市場街」を楽しむ方々や、芸文の卒業生を含めた若い世代の方々を来場者として呼び込むことに成功しています。2019年の開催においてはコアとなるコンテンツの強化という観点で「職人」がバーマスターとなる「職人バー」の多店舗展開、高岡の工場・工房・商店の蔵からの逸品を引き出す「蔵出しクラフト市」、芸文の卒業生らによる作品展示「高岡で澄む」を実施させて頂きました。「蔵出しクラフト市」については芸文のプロジェクト授業の一環として教員と学生が主体的に関わることで実現しました。市街地の屋外空間も含めた総合イベントであるがゆえ、時々の天候に左右される部分もありますが、高岡のまちが持っている資産をより魅力的に展開し、より多くの方々に高岡をまちを楽しんでもらえるように、引き続き芸文ならではの地域連携を進めていきたいと考えています。